

現代日本語の習慣相と一時性

野田 高広

maypole@gmail.com

キーワード: アスペクト ている 習慣文 総称文 現在完了 反復 限定的解釈

要旨

日本語の習慣文にテイル形が用いられる場合、テイル形はその習慣が一時的であることを表わすという説について検討を加える。ル形とテイル形の選択要因が時間的範囲の設定に求められ、さらに、「勤める」「愛用する」のような広義での習慣を表わしながらもル形を許容しない動詞群についても同様に期間設定から説明が可能であることを示す。

1. はじめに

日本語のテイル形には「彼は毎朝公園を走っている。」のように習慣を表わす用法がある。この習慣の意味は専らテイル形によって表されるわけではなく、ル形によって表わすことも可能で（「彼は毎朝公園を走る。」）、さらには「若い頃は渋谷で飲んだものだ。」のように、特に過去の習慣を表わす場合にはモノダ形も用いられる。テイル形の意味記述については膨大な蓄積があり、当然、これらの習慣（反復）用法についても種々論じられてきているが（金田一 1955; 工藤 1982; 高橋 1985 等）、依然検討すべき問題が残されているように思う。本稿ではル形とテイル形が習慣の意味を表わすと言われる場合に限定して、以下の2点に問題点を絞って論を進める。まず、テイル形が習慣の意味を表わす場合、その習慣が一時的なものであるという説について検討を加える。次に、「勤める」「愛用する」のような、広義での習慣を表わしながらもル形を許容しない動詞について本稿なりの解釈を示す。なおここでは議論が煩雑になるのを避けて、処々の問題が絡んでくるタ形や否定形は考慮に入れず、対象をル形・テイル形に絞る。

2. 習慣相¹ (habitual) と一時性 (temporariness)

習慣を表わすテイル形とル形の違いとして、テイル形は描かれる反復的な事態が一時的である場合に用いられる傾向が強いと説かれることがある（工藤 1982, 1995）。

(1) 太郎は最近ジョギングを している/?する。

テイル形はその習慣が一時的なものであることを示し、例えば工藤 (1995) の説明によれば、

¹ 本稿では、進行相 (progressive) のような、アスペクチュアルな意味の一分類として「習慣相」(habitual) を用いるが、特に習慣の意味を表わす文を指す場合には「習慣文」と呼ぶ。

(1)は、一時的であることを明示的に表わす「最近」が共起するために、ル形に比べてテイル形を用いる方が自然であるということになる。このテイル選択に関して、工藤 (1995: 156-61) では、「アクチュアル性」の有無を基準にして、習慣相を、具体的な運動を表す(=「アクチュアル」)文と脱時間化された特性規定文²との中間に位置づけた上で、「反復性(=習慣相)のバリエーション」として以下を挙げ、ここでのテイル選択の要因を反復が持続される期間の長さ(=「アクチュアル性」)に求める。

- (2) 「例の手記ですが、進み具合はどうですか」 「作業の合い間に毎日少しづつですが書いています。私の無残な過去を、辛いことですが書かねばならない」(湿原)

しかし、以下の例ではテイル形が一時的なことを表わしているとは言い難い。

- (3) 太郎は小学生の頃からジョギングをしている/*する。
(4) 太郎は30年前からタバコを吸っている/*吸う。

「一時的」の定義も問題になるが、いずれにしても、「習慣文のテイル形はその習慣が一時であることを表わす」という一般化は強すぎるのである。このように、「アクチュアル性」「一時性」などの概念で説明するのが困難な例が存在することは明らかであり、より包括的な説明が必要になるであろう。以下、次節では本稿で用いる習慣相の定義について議論した上で、4節以降で具体的な問題について検討する。

3. 習慣相の定義

習慣相は形式意味論の立場 (Carlson 1977; Krifka et al. 1995) や記述的・言語類型論的な立場 (Comrie 1976; Dahl 1975, 1985; Bybee et al. 1994) など様々な立場から論じられているのだが、ここでは当面の問題に関係が深いと思われる、反復性 (iterativity) の問題、および、習慣相と総称文 (generics) の問題等についてふれ、その上で本稿の立場を示したい。

3. 1 反復性

Comrie (1976)は習慣相を以下のように規定する。

The feature that is common to all habituals, whether or not they are also iterative, is that they describe a situation which is characteristic of an extended period of time, so extended in fact that the situation referred to is viewed not as an incidental property of the moment but, precisely, as a characteristic feature of a whole period. (Comrie 1976: 28)

Comrie (1976)において習慣相はアスペクト分類の中の imperfective の下位項目として位置づけられており、“characteristic feature of a whole period” とあるように、ここでは習慣相がある期

² 「こどもは乳を飲む。おとなは酒を飲む。どちらも人間を大きくするものだ (項羽と劉邦)」(工藤 1995: 159)

間内の全てを特徴付けるものとして、つまり属性叙述のように規定されている。これに関連して、Dowty (1979: 176-80)では、*know, love* などの状態動詞 (object-level statives) について、ある時間的範囲についてその命題が真である場合にその範囲内のどの部分についても真であるという特性 (subinterval property) をもつものとして議論されている。この特性は習慣相についてもあてはまることであり、例えば昼寝の最中を指しても「彼は毎朝公園を走る。」は命題として真であり³、この点で習慣文は状態動詞や形容詞を用いた文と共通すると考えられる。

ただし、Comrie (1976)の特異な点として、先の引用の“whether or not they are also iterative⁴”に示されるように、習慣相を広義に捉えている点があげられる。以下も同書からの引用だが、*stand, believe, live* などの状態動詞による、反復を含まないような文も習慣相として扱われるのである。

(5) The temple of Diana used to *stand* at Ephesus.

(6) Simon used to *believe* in ghosts.

(7) Jones used to *live* in Patagonia.

この場合、状態動詞によって表わされる事態は反復されるものとは考えられない点で、少なくとも日本語の「習慣」という用語にはそぐわないように感じられるのだが、英語では *used to* という過去の習慣を表わす専用形式があり、おそらく、*used to* と状態動詞が共起できるという事実、また同様の現象が他の言語にも見られることからこのように扱われているのであろう。同様に日本語にも「若い頃は渋谷で飲んだものだ。」というような過去の習慣を表わす「たものだ」が存在し⁵、無視できるものではないようにも思われるが、「?昔ここには大きなビルがあったものだ。」のように、日本語の「たものだ」は静的な状態に用いるのは不自然で、Comrie (1976)と同じ立場で論じるには慎重になる必要がある。これらの事情から、本稿ではひとまずこのような静的な状態を表す例は動的な事態の反復を表わす習慣相とは区別して議論を進める。

念のため付け加えておきたいのが、「花子は先ほどから咳をしている。」のような瞬間的な動作の反復を表わす例である。これは *cough, knock* のような、主に瞬間的な動作を表わす動詞 (semelfactive) が用いられ、その反復される均質な状態を表わすものであり、Comrie (1976)や Smith (1997)などでは *iterative* と呼ばれる⁶。この *iterative* は、その動作の反復が一場面内で完結するという点において、場面自体の反復を表わす習慣相とは区別される。この *iterative* は習慣相を中心に論じる本稿では対象としない。

3. 2 習慣文と総称文

習慣相を扱うに際して、“A cat has a tail.”のような、不定の主語についての属性を表わす総称

³ この点は既に Vendler (1957: 150-1)に同様の指摘がある。Declerck (2006: 35)も参照。

⁴ ここでの“iterative”は「ノックする」「せきをする」などのような瞬間的動作による動作の反復ではなく、動作の反復一般に用いられている。

⁵ 「子どもはよくけんかをするものだ。」のように現在時制でも可能ではあるが、この場合の「ものだ」が習慣相であるかどうかについては異論がありうる (cf. *太郎はよくけんかをするものだ)。

⁶ Comrie (1976)での *iterative* は習慣相についても当てはめられている点で広義であるが、近年では一回的場面の反復に限定されることが多いようである (Declerck 2006; Carlson 2006)。

文との違いも問題になってくるが、これについては立場による違いが大きい。習慣文を総称文の下位分類として、量化や焦点構造の違いを論じる Krifka et al. (1995) などの形式意味論の立場からの研究や、習慣相の下位区分として、habituals / habitual generics / habitual past という3分類を設ける Dahl (1985: 95-102) のような言語類型論の立場からの記述的な研究が存在する。

例えば言語類型論的な立場にある Smith (1997) は総称文について以下のように述べる。

They (=generic sentences) hold of classes or kinds, and are thus individual-level predicates. Generic sentences ascribe a property to a class of kind ... There are certain predicates, such as *extinct*, which hold only of kinds; but most predicates may be used both for individuals and for classes. ... (Smith 1997: 33)

総称文が種や類の属性を述べる文だと規定した上で、述語には *extinct* のように専ら類の主語について用いられる述語も存在するが、ほとんどの述語は個体・種のいずれの主語についても用いられることが述べられている。それに続いて、“The verb constellations of generic sentences are usually associated with dynamic situation types at the basic level of classification.” と総称文の動詞の項構造は基本レベルでは動的な事態のタイプに関連付けられていることが説かれている。例えば、“The beaver builds dams.”について、この文には総称文としての解釈が認められるが、これは Vendler (1957) の accomplishment verb による文と同一の項構造をもっており、総称文としての解釈では *the beaver* がビーバーという種を指しているのに対して、特定のビーバーを指示する場合には動的な事態を表す文⁷として捉えられるというような曖昧性も認める。

一方、習慣文については、状態を表わす場合を除けば前掲の Comrie (1976) の記述を踏襲しているようで、以下のように、とりわけ、習慣文が事態生起のパターンを表す (*present a pattern of events*) 点を強調して、前述の subinterval property をもつことから状态的 (stative) であるとも述べている⁸。

Habitual sentences are another type of derived stative. Habitual predicates present a pattern of events, rather than a specific situation, and denote a state that holds consistently over an interval. (ibid.)

このように総称文・習慣文の議論では名詞句が問題にされることが多いのだが、「ライオンは肉を食べる。」「日本人は米を食べる。」「太郎はそばを食べる。」との間にはそれほど距離があるとは思われず、とりわけ冠詞を持たない日本語ではこの名詞句の総称性を問題にするのは困難なようにも思われる。

3. 3 意図性

⁷ “The sentence can be taken as *dynamic* ... (ibid.)” と述べている。この *dynamic* は一回的・個別的な事態を描く文 (episodic sentences) であることを指していると思われる。

⁸ 一方で、同じく言語類型論の立場にある Bybee et al. (1995: 151-2) は総称文と習慣文の間に厳格な境界は設けていないようである。

英語の “habituals” は、一般的に用いられる意味と言語学者の間でのそれとでは齟齬があるようで、Lyons (1977)は以下のように述べている。

... [I]t would be absurd to say that the apple-trees at the bottom of the garden are in the habit of shedding their fruits in October, as one might say of John Smith that he habitually goes to church, or changes his shirt, on Sundays. (Lyons 1977: 716)

これは日本語についてもあてはまることであり、「スミスは土曜は教会に行きます。」という文について「習慣」というのは自然だが、「その庭の隅のりんごの木は 10 月に実を落とします。」について「習慣」というのは奇妙に感じる。両者ともに主語が個体を指示するのだが、主語が意図的な動作主である場合の方がより「習慣」らしいとは言えそうである。「彼は日ごろから爪をかむ。」のような、意図的ではない動作について「習慣」と言うのは、主語が個体であっても違和感を覚えるだろう⁹。

その他にも Dahl (1975)で議論される、習慣文における intensionality (内包性) の問題など習慣文は種々の問題を孕んでいる。このように総称文と習慣文の厳密な位置づけは一致を見ているとは言い難い状況にあり、先の日本語の名詞句の genericity 同様に本稿では手に余る問題である。日本語のル形とテイル形に焦点を絞る本稿では、ひとまず習慣文と総称文とは区別する立場をとるのだが、習慣文を動的な事態で反復性をもつものの程度の緩やかな規定にとどめたい。詳細は次節以降で述べていく。

4. 習慣相と期間限定

2 節では日本語の習慣相でのテイル選択と一時性との関連についてふれたわけだが、英語の進行相 (*be V-ing*) にもこれに似通った現象が観察される。以下は Leech (2004)からの引用である。

...[T]he Progressive concept of ‘temporariness’ applies not to the individual events that make up the series, but to the series as a whole. The meaning is ‘HABIT IN EXSISTENCE OVER A LIMITED PERIOD’... (Leech 2004: 33)

習慣文に *be -ing* が用いられる場合、“temporariness”が適用されるのは個々の動作ではなく、一連の動作全体であることが説かれている。ここには限定された期間を通して習慣的動作が存在することが述べられているのだが、それに続けて、同じ習慣文でも“I take dancing lessons.”に較べて現在進行形の“I’m taking dancing lessons.”の方が期間が短いことを表わす点について注意を促している。

工藤 (1982, 1995) のテイル形についての説明に拠れば、日本語のテイル形と英語の現在進行形がこの一時性 (temporariness) という点において共通の性質を持っているようにも思われる

⁹ 日本語なら「癖 (くせ)」というところだが、英語ではいずれも *habit* が用いられる。

のだが、これは事実の誤認であり、2 節でふれたように、日本語のテイル形に「彼は 30 年前から (30 年間) タバコを吸っています。」のような一時的とは考えがたい例が存在する。

これに関連して、英語には、原則として、*since* や *for* のような、過去の時点から現在までの継続期間を設定する副詞句 (節) を用いた場合には、現在完了形 (*have -en*) や現在完了進行形 (*have been -ing*) の使用が義務的になるという制約がある (Declerck 2006: 238-40, 608-15) ¹⁰。これは、過去のある時点から現在までの状態という現在完了形によって表わされる時間構造が、これらの時間副詞によって設定される時間に一致するからであり、永続的な現在を表わす単純現在形はこれらの時間副詞により設定される時間に一致しないために共起できない旨が説明されている ¹¹。

(8) I {have lived / *live} here since 1965.

(9) I {have known / *know} him for a very long time.

(10) I {have already been waiting / *am already waiting} for her for two hours.

また、現在完了形と現在完了進行形の違いとして、以下の(11)(12)のように、進行形が用いられる場合は時間副詞で設定された期間が一時的であることが表わされ、進行形が用いられない場合には期間が永続的なものであることが描かれるという (Declerck 2006: 271-3)。

(11) Ever since I was fifteen I *have slept* only five hours a night.

(12) I *have been sleeping* ten hours a night since we have been on holiday.

(13) Jack *has {been looking / looked}* after the business for several years.

しかし、Leech (2004: 49)によれば、(13)での進行形と非進行形とは多くの文脈で“free choice”であると述べられているように両者の使い分けは微妙な問題であって、さらには、“Debbie is a very good tennis player. She's *been playing* since she was eight. (Murphy 2004: 18)”, “I've *been learning* English for a long time. (p. 22)”のように、一時的とは考えがたい現在完了進行形の例が英語学習者向けの文法書に挙げられている。このように、現在完了では、単純現在形と現在進行形の間に見られるような一時性 (temporariness) の対立が弱化しているようであり、英語の現在完了進行形が一時的な期間の継続であることを表わすという一般化には再考の余地がありそうである。

このような問題もあるのだが、原則として、英語では、現在完了形が過去のある時点から現在までの期間にわたる事態であることを表わす一方、進行形はその事態が一時的であることを表わすというように、それぞれの形式は独立した機能を担っていることが分かる。

そこで日本語について考えてみると、「～から」によって設定される、過去のある時点から現在までの期間と、ル形によって表わされる不定的な現在とのミスマッチが先の容認度の低さと

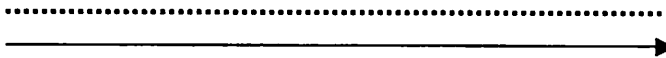
¹⁰ *for* 句は現在を含まない単なる不定的な過去の期間を表わす場合もあり、Declerck (2006: 614-5)ではその違いについても詳細に論じられているがここでは問題にしない。

¹¹ 口語的文脈では現在時制で現れることもあるという。 “I'm *feeling* much better since I {began / have begun} yoga exercises.” (Declerck 2006: 610-1)

して現れていると考えられ（詳細は後述）、これは先に紹介した、英語の現在完了形と単純現在形との相違として観察される *since* 節との共起制限に極めて近いといえることができるだろう。英語の現在完了形と進行形とがそれぞれ異なった機能を担っているのに対して、日本語の習慣を表わすテイル形は一時的とはいいがたい時間副詞が共起できることから、英語の現在完了形とおなじく、過去のある時点から現在まで習慣が継続していることを専らに表わしていると考えられる。

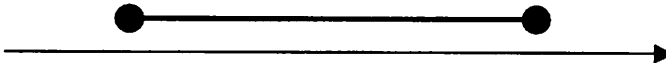
このように見てくると、過去の時点から現在までの期間の設定と一時性とは問題となる英語とは異なり、日本語の習慣相のル形とテイル形との違いは、現在までの期間が設定されること自体が重要であることが分かる。そこで、この考察に基づき、時間のスケールにおいて限界（時間的範囲）が設定されているか否かを基準にして、以下のように習慣相を非限定的解釈と限定的解釈に二分して考えてみる¹²。

i) 非限定的解釈:



期間が限定されておらず、無時間的。時間軸上に配置されると線状のようにも感じるが、あくまで点の集合として捉えられているのであって、個々の事態間に厳密な意味での連続性はない。

ii) 限定的解釈:



期間が限定されており、その範囲内に対象世界的には離散的に存在する個々の事態は連続体として把握される。期間の長短ではなく、時間的に限定されているか否かが問題であり、限定されることによって点の集合は線として捉えなおされている¹³。

この上でさらに以下のように仮定してみたい。

- (14) 習慣相とされるものの中には、非限定的解釈と限定的解釈とが含まれる。そして、原則として、非限定的解釈の場合にはル形が、限定的解釈の場合にはテイル形が選択される。

¹² Lyons (1977: 680)の“timeless”と“omnitemporal”の議論で用いられる “time bound”という概念も参考にしている。

¹³ 端が設定されることにより、もともと存在しない連続性が補完されるという点ではカニッツアの三角形を連想してもよいだろう。また、非限定的解釈に関して、例えば「地球は丸い。」という文について、恒久的な時間が存在する（汎時間的）とも言えるし、時間は存在しない（無時間的）とも言える。

このように単純化して捉えることにより、現代日本語のル形とテイル形が交換可能なケースなどを説明することが可能になることを次節で示す。

5. 習慣相とアスペクト対立

5. 1 習慣相のル形とテイル形

先に、習慣相でのル形とテイル形とのアスペクト対立についての先行研究を確認しておきたい。以下は工藤（1982）に挙げられている用例である。

- (15) わたし、強い。夜、父のをこっそり飲んでるから。(内灘夫人)
- (16) 菊子はいつも下うつ向いて、ぼんやり考えごとしながら歩いているのか。(山の音)
- (17) でもきみはちゃんと毎日食事して、眠って彼とセックスもし、買物やらドライブにも出掛けている。(変奏曲)
- (18) 支那でおいしい所謂支那料理を食べているのは小数の支那の大金持が外国の遊覧客だけです。一般の民衆はひどいものを食べています。(惜別)
- (19) 何時行っても画をかいていた。(その妹)
- (20) あの頃のことを思うと、百円ぐらいのお金はしょっちゅう紙入れの中に入っていたんですがねえ。(家)

工藤（1982）は(15)から(18)のような例はテイル形の派生的意味としての「反復（＝習慣相）」に分類するが、その一方で、(19)(20)は述語がル形と交替できない点でこれらを典型的な「反復」とはみなさず以下のように述べる¹⁴。

これも文のアスペクチュアリティとしては反復であるのに違いないが、「動きの継続」「変化の結果の継続」という基本的意味がかわらないままに、「何時行っても」「しょっちゅう」という反復を示す形式がついたことによって反復の意味がでてくるのであるから、基本的意味の一バリエーションとして、あるいは、基本的意味と派生的意味の中間物として位置づけなければならないだろう。（工藤 1982: 76-7）

これを受けて、習慣相に限らずテンス・アスペクトの網羅的な記述的研究である高橋（1985）では以下のように述べられている。

これは、継続相の基本的なアスペクト的な意味がいきているから、完成相にかえられないのである。ここでは「バリエーション」とか「中間的」とかいわなくても、はっきりと継続相の基本的な意味がいきていて、完成相と対立しているのである。（高橋 1985: 112）

本稿はこの高橋（1985）の立場を支持し、先の(19)(20)はテイル形によって継続的な状態(imperfective)が表わされている、つまり、アスペクトの意味が積極的に示されていると考え

¹⁴ 明示的ではないが工藤（1995: 156-7）でもこの立場は維持されているようである。

る。以下ではこの妥当性を確認する。

5. 2 習慣相と時間副詞

まず、以下の(21)について述語の表わしているアスペクトの意味について考えてみたい。

(21) 彼は、毎朝、公園を 走っています／走ります。

このテイル形とル形は、前者がジョギングをする最中（未完了）を、後者が事態全体（完了）を示すというアスペクト的な対立をなしているようにも見えるが、テイル形についてじっくりと内省を働かせてみると、この「ている」は進行相を表わしているようにも反復的な意味を担っているようにも感じられ甚だ曖昧である。実際にはどちらを表わしているのか、また、曖昧だとすればその曖昧さはどこから来ているのが問題になってくる。

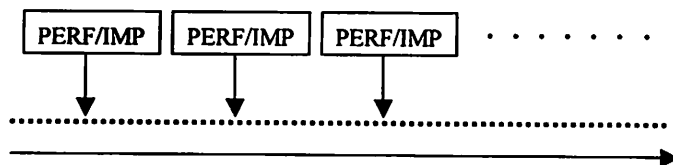
問題を切り分けるために明確な変化時点を持つ「起きる」について検討する。まず、(22)のル形とテイル形の違いは perfectivity の対立と考えることができる。両者ともに反復を表わしているのだが、テイル形では遅くとも六時の時点には起きた後の状態（結果状態）が実現していることが表され、ル形では六時までに寝ている状態から起きている状態への変化が実現することが表される。

(22) 彼はふだん六時までに 起きている／起きる。

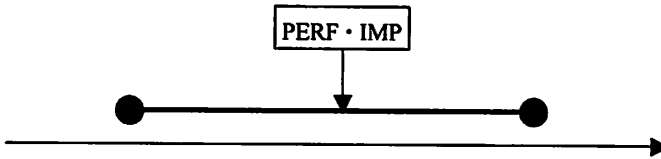
(23) 彼はふだん目覚ましが鳴るのと同時に 起きている／起きる。

しかし時点解釈を強制する副詞節に置き換えた(23)では同様に解釈することはできない。(22)の時間副詞「～までに」が六時を含むそれ以前の時間幅を表すのに対して、(23)の副詞節は時点を示すのであり、そこではテイル形による状態解釈（結果状態）は排除され、この述語は「[寝ている状態] → [寝ていない状態]」という状態変化としてしか解釈できない。(22)のテイル形が結果状態という状態の意味を担っているのに対して、(23)のテイル形は専ら反復性の意味表示を担っているのである。

ここで先の(14)に述べた非限定的解釈と限定的解釈という観点を導入してみたい。(22)は無時間的な非限定的解釈が適用される文であり、ここでのル形・テイル形という対は完了・未完了というアスペクト的機能の表示に特化されていると考えてみると、以下の図のように無時間的にどの時点においても完了と未完了とが成立し（図中では「PERF/IMP」と表わす）、そのアスペクト表示はル形とテイル形が担うことになる。どの時点をとっても事態は存在するという点で前述の subinterval な性質をもっており、状態的であるということもできる。



一方の(23)は、ル形とテイル形との対立が完了・未完了というアスペクト表示を担っている
と見なすことができない。ここで注意したいのは(23)のル形はアスペクト的に完了相を表わし
ていることで、時間軸上に無時間的に完了的事態が布置されていると考えられる点において、
このル形については非限定的解釈が適用されるとした(22)でのル形（完了相）と同様に考えれ
ば十分であろう。問題になるのは、具体的な状態変化の結果の状態を表わすとは考えられない
(23)のテイル形であり、テイル形にもかかわらず完了相を表わしている点において非限定的解
釈では説明することができない。そこで限定的解釈が適用されていると考えてみる。



まず、先の非限定的解釈では「PERF/IMP」で表わした視点がどの時点にも存在しうるものであ
ったのに対して、この図では視点が一つの時点にしか存在しない点に注意されたい¹⁵。この時
点とはすなわち発話時現在であり、この点において、非限定的解釈に対して限定的解釈はダイ
クティックな読みだといえる。なお、非限定的解釈・限定的解釈ともに視点が位置する時点が
「現在」ということになるのだが、非限定的解釈での「現在」が過去・未来をも含んでいる点
で包括的な意味での「現在」であるのに対して、限定的解釈での「現在」は排他的であり、さ
らには指示的（referential）だということもできるだろう（cf. Quirk et al. 1985: 175-6）。

さて、(23)のテイル形は事態の反復を専らに表示しており、非限定的解釈はこの現象と矛盾
する。そこで適用される限定的解釈では、個々の事態が連続的に捉えられており、一般的・個
別的という genericity の違いはあるものの均質な連続性の中に視点が設定されるという点にお
いて、スキーマ的には「車が走っている。」のような進行相と同様に捉えられる。この相同性が
限定的解釈での反復を表わすテイル形を動機付けていると考えられる。

この反復性を表わすテイル形に限定的解釈を適用する傍証として、ここで再び(21)に戻って、
時間副詞の共起制限について検討したい。

(21)に過去の時点からの継続を表わす時間副詞を加えてみると以下のように違いが現れる。

(24) 私は一昨年から毎朝、公園を 走っています/*走ります。

この「一昨年から」という時間副詞により期間が限定されるとル形が非文法的になるのは、非
限定的解釈が適用されるル形がもつ、時間的に限定されていない（non-time bound）という特徴
によると考えられる。(21)では、時間的に限定されていないために非限定的解釈が適用される
ル形が自然であるのに対して、時間副詞によって期間が限定された(24)では、その限定性がル
形のもつ無時間的な素性と衝突する。このル形と期間限定副詞との共起制限はこのように説明
されるだろう。

¹⁵ ここで「PERF・IMP」と記すのはル形とテイル形とがアスペクト的な対立を示さないことを表わしている（後述）。

さらに、(21)のテイル形が進行相的意味を表示しているのか反復性を表示しているのか曖昧であったのも、この非限定的解釈と限定的解釈との違いから説明される。無時間的に視点が設定される非限定的解釈が適用される場合には、それぞれの時点において完了・未完了のアスペクト対立がル形・テイル形という形態によって表示されているように感じられるのに対して、発話時現在に視点が設定される限定的解釈が適用される場合には、過去の時点から現在への連続として捉えられる。(24)での期間を表わす副詞の共起は、ある限定的な期間にわたる反復の連続体としての捉え方（限定的解釈）を強制していると考えられる。その一方、期間を表わす副詞が共起しない(21)は期間の限定についてはニュートラルであって、そこに期間を限定するようなニュアンスを感じるか否かによって限定的・非限定的の二通りの読みに分岐する。このようなプロセスが反復性と進行相との曖昧性として現れていると考えられる。これは先の(22)のテイル形についても同様であり、前述のように時間副詞によって結果状態の反復の解釈に傾くのは確かだが、そこに期間限定的な文脈を想定する場合には完了的な動作の反復として解釈することも可能であろう。

付言しておきたいのが、先の限定的解釈の図において「PERF・IMP」と示したようにそこでのテイル形が具体的動作のアスペクト表示を担っていないという点である。これは以下のように、限定的解釈を強制する文脈に動作の継続時間を示す副詞が共起するか否かによって確かめられる。

(25) 私は一昨年から毎朝、公園を〔何時間も／6時から7時の間／ぜいぜい息を切らしながら〕 走っています／*走ります。

(26) 私は五年前から毎朝、目覚ましが鳴ると同時に 起きています／*起きます。

時間副詞が重畳した複雑な文ではあるが、(25)のように持続時間や動作様態を表わす副詞が共起することは可能である。このことから、このテイル形は動作の継続の反復を表わしうということとはできるだろう。一方の完了的な動作の反復としてしか捉えられない(26)を考え合わせると、このテイル形は完了も未完了も表わしう。つまり、限定的解釈のテイル形は具体的動作のアスペクト表示を担っていないということになる。

これに関して、金田一（1955）は習慣的な動作を「反復進行態」と名付けており、「彼は毎朝バイブルを読んでいる。」について、「読む」に要する時間が無視して用いられていて、元来は継続動詞である「読む」が臨時に瞬間動詞化し、それが再び継続動詞化して用いられたもの」と述べているが、この説明はまさに本稿での習慣相の限定的解釈の捉え方に一致するものである。

最後になったが、本節の冒頭にとりあげた工藤（1995）からの用例(19)は、非限定的解釈が適用されたものと考えられる。いわば可能世界的に、どの時点を選択した場合にも、そこでは「画をかいている」という状態が存在するのであり、ここでのテイル形は専らに未完了の意味を表示している。一方の(20)については(21)と同様の理由でテイル形が表わしているのが反復なのか結果状態なのかが曖昧な文だということもできそうなのだが、一回的な場面を描いた「*

百円ぐらいのお金は紙入れの中に入った。」という文が非文になることから分かるように、もともと「ている」が義務的でありル形とテイル形でアスペクト的な対立を示すことができない。このように(20)は典型的な動詞文ではなく、結果状態をあらわす例として扱うべきではないだろう。

以上、本節では非限定的解釈と限定的解釈という観点を導入し、習慣文におけるル形・テイル形の選択傾向についての説明を試みた。時間的な範囲が限定されているか否かという点が重要であって、「最近」「この頃」などの時間的近接性を表わす副詞とテイル形の共起傾向についても、これらの副詞の共起した文には限定的解釈が適用されていると考えれば理解されるだろう。さらに、「一時的」と説明されるものはこの限定的解釈に含まれる、限定される期間が短いケースということになる。

6. テイル形が義務的な動詞

「太郎は漱石を愛読 ?する／している。」のように、習慣的な意味を表わしながらも現在時解釈でル形の容認度が低い動詞が存在する。このような動詞についてはすでに議論がなされており、吉川(1976)は以下のように述べている。

以下の例は現在時解釈ではル形を許容しない。

・学校で、はとをかつているところもあります。

この例文で、「かつている」は毎日する個々の行動がくりかえされることを意味しはするが、「くりかえし」の例にははまらない。「かう」ということ自体が数日から数年にわたる行為を意味するからである。従って、「毎日かつている」は正しくない。同じような語として、「くらす、生活する、住む」などがある。(吉川 1976: 198)

ル形の容認度には若干の個人差があるようだが¹⁶、他にはおよそ以下の動詞が挙げられるだろう。続けて例文も挙げる。

通う、通勤する、付き合う、交際する、暮らす、生活する、住む、定期購読する、愛用する、愛読する、営む、経営する、育てる、養う、養育する、所属する、隣接する

(27) 太郎は新宿の職場に *通勤する／通勤している。

(28) 花子は太郎と *付き合う／付き合っている。

(29) 花子は大阪で *暮らす／暮らしている。

(30) 太郎は囲碁雑誌を *定期購読する／定期購読している。

(31) 太郎はハーブ石鹸を *愛用する／愛用している。

¹⁶ 容認度に個人差はあるが、一般に対話の場面を設定した場合のル形の容認度は低く、小説などの語りの文脈でのル形の容認度は比較的高いようである。とりわけ台本のト書きや人物紹介などの脱時間的な文脈ではル形の方がむしろ通常であり、内省へのこれらの影響は無視できない。より適切なコントロールが必要になってくだろう。

(32) 私の父は時計屋を *営む／営んでいる。

吉川（1976）に説かれるように、これらの動詞には「毎日」「いつも」「しょっちゅう」などの頻度を表わす副詞が共起しにくいという特徴が認められる。この事態反復を前提とする頻度副詞との共起制限があるという点で、これらは3. 1で検討したような反復性を表わす典型的な習慣文ではないが、ここでは先の限定的解釈・非限定的解釈との関連で検討する。

まず問題にしたいのは、ル形の容認度が低い事実である。このル形の容認度の低さには、「勤める」「（～と）付き合う」など、これらの動詞が持つ、具体的動作を指し示すことができないという特徴が関わっていると考えられる。たしかに「勤める」という動詞には「電車に乗る」「職場で事務作業をする」などの具体的な意味を含み持っているように感じられ、「勤めている」という場合、それらの動作が反復されるさまが表わされているようにも感じられる。しかし、通勤途中の電車に乗った場面や、職場のいすに座った場面で、例えばそこに掛かってきた電話への返答として「今、勤めているとこ（最中）なんだよ。」ということとはできない。その他の「養う」「付き合う」なども同様である。このように、これらの動詞は具体的な動作を指し示すことができないという共通点をもっており、このことが具体的動作の反復としての把握であるル形による非限定的解釈を阻害する。ル形の容認度の低さはこのように説明されるだろう。

他方、テイル形が義務的に選択される事実については、これらの動詞が個々の事態の反復を連続体として捉える限定的解釈をとらざるを得ず、前述のようにその連続体への内的な視点（imperfective）をとるべくテイル形が選択されていると考えられる。5節で扱った「走る」「起きる」などの動詞では、離散的に存在する個々の具体的な事態が、テイル形によって連続体として捉え直されていた（限定的解釈）のに対して、吉川（1976）に説かれるように、これらの動詞は一定期間にわたる連続的な状態を本来的に表わしている。その長短はともかく、ある時間的範囲にわたる状態の一局面がテイル形によって切り取られているという点において5節で議論した限定的解釈が適用された習慣文と同一視して問題ないだろう¹⁷。このことは以下のように時間的範囲を限定する時間副詞との共起が自然であることから窺える。

(33) 彼は5年前から新宿の職場に 通っている／*通う。

(34) 彼は10年前から5人家族を 養っている／*養う。

付言すると、具体的動作を指し示すことができないという点は金田一（1950）の第四種の動詞にも共通する性質であり、これら第四種動詞にテイル形が義務的であることも同様に説明されるだろう。ただし、一口に第四種動詞と言っても、「彼女は青い目をしている。」「眼前には山が聳えている。」は連体修飾節にすると「青い目をした少女」「眼前に聳える山」というように、第四種動詞とされる動詞句のなかでも形式的な違いが現われ、実際には単純な問題ではないのだが、少なくとも文末用法においては、ル形では具体的な動作を指示することができないとい

¹⁷ 先の動詞は動作主体によって積極的に保持されなければ継続できないような事態に偏っているように思われる。この意図的であるということは期間が限定されることに深く関わるだろう。

う消極的な要因によってテイル形が選択されているという両者の共通点は指摘できる。

最後に、容認度において揺れのある事実について考えてみたいのだが、もし、「愛用する」のル形を許容できるとするならば、そこではハーブ石鹸を使って洗うという具体的動作の反復(非限定的解釈)として捉えられていると考えられる。しかし、「勤める」の例と同様に、現在、ハーブ石鹸を使用している最中の状態について「*今、ハーブ石鹸を愛用しているところだ。」ということとはできない。つまり、この「愛用する」は具体的動作を指示することはできないということになるだろう。ただし、「通勤する」については、電車に乗っている途中を指して「今、通勤してるところだよ。」と言えるようにも思われ、さらには「通勤中に気分が悪くなった。」という言い方は全く自然であるので、先に示した動詞の中では「通勤する」は具体的動作も表わしうる周辺のものだとすることができる。また、「付き合う」について、男女が手を繋いで歩いているさまを指して「付き合ってるね。」と言えるのであれば、そこには具体的動作から抽象的な状態への推論が働いている。

7. 結論

ここまで習慣相でのテイル形選択と事態の一時性、及び、「勤める」「愛用する」などのテイル形が義務的である動詞群に焦点を絞って考察を進めてきた。繰り返しになるが、テイル形の選択要因として「一時性」というのは狭すぎるのであって、期間的に限定されるか否かという点に求められることを主張する。習慣相とよばれるものの中には無時間的な非限定的解釈が適用されるものと期間が限定される限定的解釈が適用されるものとの二種類があって、前者の場合には完了・不完了というアスペクト対立が分岐し、それがル形とテイル形という形態に現れる。一方の限定的解釈が適用される場合は時間的範囲内の連続として捉えられており、期間を限定する時間副詞によって分離することができる。無文脈での「彼は毎朝公園を走っている。」の曖昧性は時間副詞の不在に起因し、進行相の読みとなる非限定的解釈と反復としての読みとなる限定的解釈の二通りの間で揺れるということになる。

もう一つの論点として「勤める」などの動詞の文においてテイル形が義務的であることも限定的解釈が適用された例と考えることによって説明が可能であることを主張した。この場合には指示的(referential)な具体的動作が想定できないことに求められる点についても論じた。この動詞群に関して若干ふれた金田一(1950)の第四種動詞との関連については稿を改めて論じたい。

本論で述べたように習慣相は様々な立場から論じられている問題であり、例えば、Krifka et al. (1995)などの形式意味論的アプローチでは情報的な焦点との関連も問題になっており、当然看過できない問題ではあるが本稿では扱えなかった。また、アスペクト体系の中での習慣相の位置づけについては研究者の中で依然コンセンサスが得られているとはいえない状況であり、これも大きな問題として残されている。

参考文献

- Bennett, Michael and Barbara Partee (1972/78) Towards the logic of tense and aspect in English. *Technical report* (1972), System Development Corporation, Santa Monica, CA; published with a new appendix (1978) by Indiana Linguistics Club, Univ. of Indiana, Bloomington. (Reprinted in B. Partee (2004) *Compositionality in Formal Semantics*, 59-109. Oxford: Blackwell.)
- Binnick, Robert (1991) *Time and the Verb: A Guide to Tense and Aspect*. Oxford: Oxford University Press.
- Bybee, Joan (1994) The Grammaticization of Zero: Asymmetries in Tense and Aspect Systems. In: William Pagliuca (ed.) *Perspectives on Grammaticalization*, 235-54. Amsterdam: John Benjamins.
- Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Language of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Carlson, Gregory N. (1977) *Reference to Kinds in English*. Ph.D. dissertation: University of Massachusetts, Amherst. (Published 1980 by Garland, New York/London.)
- Carlson, Greg and Francis J. Pelletier (eds.) (1995). *The Generic Book*. Chicago: University of Chicago Press.
- Carlson, Greg (2006) Generics, Habituals and Iteratives. In: Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of Language & Linguistics*, 2nd edition. London: Elsevier.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dahl, Östen (1975) On Generics. In: Edward L. Keenan (ed.) *Formal Semantics of Natural Language*, 99-111. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dahl, Östen (1985) *Tense and Aspect Systems*. Oxford: Blackwell.
- Declerck, Renaat (2006) *The Grammar of the English Tense System*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Dowty, David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Krifka, Manfred, F. J. Pelletier, G. Carlson, A. ter Meulen, G. Chierchia and G. Link (1995) Genericity: An Introduction. In: Greg Carlson and Francis J. Pelletier (eds.). *The Generic Book*, 1-124. Chicago: University of Chicago Press.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd edition. London: Pearson Education Limited. (first edition, 1971)
- Lyons, John (1977) *Semantics*, vol. 2. Cambridge: Cambridge University Press.
- Murphy, Raymond (2004) *English Grammar in Use*, 3rd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Smith, Carlota (1997) *The Parameter of Aspect*, 2nd edition. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

(first edition, 1994.)

Vendler, Zeno (1957) Verbs and Times. *The Philosophical Review* 66: 143-160. (Reprinted in Z. Vendler

(1967) *Linguistics in Philosophy*, 97-121. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.)

金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15: 48-63. (金田一 1976 に再録)

金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』10. (金田一 1976 に再録)

金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 東京: むぎ書房.

工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13(4): 51-88.

工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト: 現代日本語の時間の表現』 東京: ひつじ書房.

高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス (国立国語研究所研究報告 82)』 東京: 秀英出版.

吉川武時 (1976) 「現代日本語のアスペクトの研究」金田一 (編) 『日本語動詞のアスペクト』, 155-327. 東京: むぎ書房. (初出, 1973. *Linguistic Communications* 9: 64-236)

Habituals and Temporariness in Japanese

Takahiro Noda

maypole@gmail.com

Keywords: aspect, *-teiru*, habituals, generics, present perfect, iterative, time bound

Abstract

The habitual aspect in Japanese can be expressed either by the simple present form (zero form) or by the progressive form (*-teiru*). It has sometimes been maintained that habitual sentences with *-teiru* represent temporariness (e.g. *Taro-wa rokuji-ni oki-tei-masu*. 'Taro is getting up at 6:00 [these days]'). However, this observation is problematic, because we can find habitual sentences collocating with temporal adverbs specifying a long-term period (e.g. *yōshō-no koro-kara* 'since childhood'), which can not be interpreted as temporary. This paper argues that the *-teiru* form is selected over the zero form when the duration of the habit in question is specified, regardless of the length of the duration. It is further suggested that this temporal delimitation is also a crucial factor in the often necessary use of the *-teiru* form with a group of verbs (e.g. *tsutomeru*, *aiyōsuru*) denoting habits in their own right.

(のだ・たかひろ 東京大学大学院総合文化研究科博士課程)